

事であつて、即ち性格美をいふのであります。芭蕉の虚實の論もこの間の消息を示したものであります。要するに空想や冥想では勿論いけないし、又感情ばかりで、それを対象によつて具象化する事が出来なかつたらば虚に等しくなります。又感情の乏しい対象を掴んだのでは餘韻も餘情もない實に等しいものとなる。豊かな感情を対象によつて具象化されたものこそ、實を踏んで花の心であらうといふのであります。芭蕉が「薄墨に梅の匂へるが如く」とか「黄金を打ち伸したるが如く」といつたのは、いづれもその間の問題をつたへたものであります。又武術の極意である「半眼をひらく」といふことなどもそれでありまして、即ち、兩眼を敵につければ自らに隙が出来ゆるゑに、半眼を敵につけ半眼を内につけるといふ意味でありまして、これも虚實の論に等しいものであらうと思ふのであります。

これを一層具體的に説明すれば、芭蕉が「笈の小文」の紀行で、高野山へ登つた時、曾て主君蟬吟公の遺髪をたづさへて、遁世を胸に秘めてはるく、と此處へ登つたことを思ひ出したのでした。深い谷高い峯の間を縫うてゐる細道を登つてゆくにけれ、それら往時の事など、さまざまの事が思ひ出されて、うら悲しさをさへ覚えて、しきりに國元の父母が戀しくなつて來るのを感じたのであります。さうした折から遙かの谷の方で、雉が一聲二聲鳴いたのを聞きつけ

父母のしきりに戀し雉の聲 芭蕉

かうした一句を得たのでありますから、「父母のしきりに戀し」といふ感情を、「雉の聲」といふ対象によつて具象化されたのであります。又対象によつて起つた感情を、対象から抽象して詠じ出す場合も同様でなければなりません。

鬼貫の『まこと』

芭蕉が「古池」の句を作つて蕉風開眼をした年と同時代に、「まこと以外に俳諧なし」と云つた鬼貫の存在を等閑視することは出来ないであります。彼はその作品も一風格を成してをるのことは勿論であります。その俳諧に對する所論に於いて、彼の俳壇的位置を一層高めてをること、誰人も肯定するところでありませう。即ちその著「ひとりごと」中に

「俳諧の道は、あさきに似て深く、やすきに似てつたはりがたし。初心の時は浅きより深きに入、至りて後は深きよりあさきに出とか聞し。むかしは人の心すなをにして、初中後を経しか

ど、今はその修業する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。これをおもふに、俳諧は只當座の化口にして、根もなきい草なりと、かろき事におもへるなるべし。是もまた和歌の一體とか聞時は、かりにも淺く敷おもふべき道にはあらぬを、ほいなき事にぞ侍る。」

「大かたの人は口にまかせていひつゞくるを、この道の達者なりと心得て 更に我に益のある事をしらす俳諧まことにもつく中立なりと、心をよせて修業すべし。下略」

「ことやうの句を作りて、それを新しとおもふ人は、此處を深く尋ね見されば、遠きさかひに入がたく侍らん。詞は古きを用ひ、心は新しきところ聞しか。」

「句を作るに、すがた、調のみを工みにすれば、まことすくなし。只心を深く入つて、姿、ことばにかゝはらぬこそこのましけれ。下略」

「俳諧をする人、あらましにもいひこなせば、はや得たり顔に止まるあり、無下にほいなくぞ侍る。或時は句もなりやすきやうにおぼえ、又或時はひたすらなりがたくもなり侍らん事、幾かはりも有ぬべし。深く入なん人は、其程く功つもありて猶むづかしき事覺侍らん。修業の道に限りあらざれば、至りて止まる奥もあらじ。只臨終の夕までの修業としるべし。下略」

とかう述べてをるのであります。これらの諸言は、全く俳諧の道を説き盡し得て餘すことのない眞に味ふべき言葉だと思ひます。——句の姿や調のみを巧みにすることに因はれてゐたのではまことが少い、自然を靜觀し内に深く思ひ入ることを旨として、詞や姿にかゝはらぬやうにしなければいゝ作品は出來得ない。又俳諧や俳句を作りそめて、少し出來るやうになるともういつばしの作家のやうな態度になつてしまふ事はまことよくない事である。或る時は句作が樂々と出來る時もあるが、また或る時はどうして苦しんでも出來ない時もある。かうした句作に對する修業が幾度か變りくつて、さうしてますます深くなるにつれて、さうした修業から得た尊い經驗を味ひ顧みるにつけ、又々新しいむづかしさを覺えるであらう。句作修業の道には生涯をかけても限りのない事であるから、どこまで行つたからといつて奥底のない事である。が故に自分が死に面して息を引取るまでこの修業はつゞけねばならぬものである。——といふのであります。やゝもすると天狗になり勝ちの作家を警めた卓見であらうと思ひます。この外に「ひとごと」は全篇俳諧に對する金科玉條でありまして、誰人といへども必讀せねばならぬものであらうと思ひます。

鬼貫の作品を讀んで第一に感ずる事は、芭蕉にしても蕪村にしても一茶にしても、自己の句風

を樹立するまでには、先覺の作風に倣つたものを見るのでありますが、鬼貫に於きましてはそれが殆ど見られない事でありまして、徹頭徹尾彼一流の句風で押し通してゐる事でありまして。さうしてその句の内容にもその表現法にもかなりな放膽であり、又自由さを見せてゐるのであります。

鶯や梅の小枝に糞をして 鬼貫
草麥や雲雀があがるあれさがる 同
ひらくと木の葉うごきて秋ぞ立つ 同

などがその一例でありませう。さうして鬼貫の代表句と見るべきものは

春の日や庭に雀の砂あびて 鬼貫
のり懸や橋にほふ躰の内 同
藪垣や卒塔婆のあひをとぶ螢 同
行く水や竹に蟬鳴く相國寺 同
によつぼりと秋の空なる富士の山 同

あたたかに冬の日なたの寒きかな 同
古寺に皮むく椶櫚の寒げなり 同
井のもとの草葉におもき氷柱かな 同
兼平が塚渺々と刈田かな 同

などでありまして、どの作品にも鬼貫たる風格が躍如としてゐるのであります。空道和尚が鬼貫に向つて「如何なるか是なんぢが俳眼」と訪ねられた時、鬼貫は

庭前に白く咲いたる椿かな 鬼貫

と作つて答へてをりますところを見ますと、芭蕉が古池の句によつて事物をありのまゝ見るといふことに蕉風俳諧の根柢を置いたのと、この「庭前に白く咲いたる椿かな」と眼前の一つの光景をありのまゝ叙して自分の俳句境を示した鬼貫の態度とは、決して二つの道を説いたものとは考へられないものでありまして、立派に道破してゐるのであると思ふのであります。

かくの如く鬼貫の俳句に對する理解が、芭蕉と同時代に世に現はれたるに不拘、鬼貫に名聲が

あがらなかつたといふことは、何んに基因するものであらうと考へますに、芭蕉の人格と鬼貫の人格との相異そのものに由るといふ事が出来ませう。芭蕉の人格が圓滿で柔か味をもつた水晶のやうであるとすれば、鬼貫の人格は、尖つた冷い劍のやうな感を抱かせるといふ相異があります。さうして芭蕉のあらゆる苦心の結果悟り得たものと、鬼貫の論理的に考究した結果に得られたものとの相異は、假へ一つの線の上にはあらはれた二つの玉であつても、その大きさと距りはその作品が何よりも有辯に物語るものであらうと思ふのであります。

蕪村時代

蕪村の作品が、芭蕉なり又は元祿の俳風乃至より以前の俳風に影響されてゐる點を考究して見ますと、門人高井几童が蕪村の像に記した一節に「且暮俳諧に心をゆだね、宗阿のもとによりて業成ぬ。はたおのづから畫をよくす。後京師にうつり、芭蕉堂を一乗寺むら金福寺に建つ。俳諧畫事ともに世に鳴る門人鮮しとせず。時に天明といふ三のとし發卯十二月に歿しぬ。實に中興の首唱なりといひつべし。」と書いてをります。又「蕪村文集」中「芭蕉堂再興記」に蕪村自ら記

して「一四明山下の西南、一乗寺村に禪房あり、金福寺といふ。土人の口稱して芭蕉庵と呼ぶ。階前より翠微に入ること二十步。一塊の丘ありすなはち芭蕉堂の遺蹟なりとぞ」中略「いにしへ鐵舟といへる大徳、この寺に住みたまひけるに、別に一室を此ところに構へ、手自雪炊の貧をたのしみ、客を謝して深くかきこもりおはしける。蕉翁の句を聞ては、泪うちこぼしつゝ、あなたふと忘機逃禪の郷を得たりとて、常に口すさみ給ひけるとぞ。其比や蕉翁山城の東西に吟行し、清瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に薰風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に寒獨行の鉢たゞきを憐み、あるは薦を着て誰人ゐますと、うちうめかされしより、きのふや鶴を盗まれしと、孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳いては、麻のたもとに曉天の霞をはらひ、白河の山越して湖水一望のうちに杜甫が背を決、つひに辛崎の松隴々たるに、一世の妙境を極め給ひけん。されば都徑徊のたよりよければとて、折々此岩阿に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野の夢の、あとなくなりたまひしのち、かの大徳ふかくなげきて、すなはち草堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻としたひ、遺志にそなへたまひけるなるべし。」と記してをります。さうして

洛東芭蕉庵成式

耳目肺腸こゝに玉巻く芭蕉かな

蕪村

といふのが句集に見えるのであります。蕪村が芭蕉及び元祿の作品に對して、どういふ感じを抱いてゐたかといふ事は、文集の上では「新花摘」に於ける其角の五元集の事に對して書いてゐるの外、あまりに多くを見る事が出来ないやうであります。その作品を通しては相當に散見する事が出来るのであります。

金福寺芭蕉翁墓

我も死して碑に邊せむ枯尾花

蕪村

この一句を見ても、蕪村が如何に芭蕉を崇拜してゐたか判るのであります。更に

時雨るゝや我も古人の夜に似たる

蕪村

は時雨の句に最も秀でゝをる「猿蓑」に對しての追憶の心持が十分に窺はれるのであります。又

笠着てわらぢ穿きながら

芭蕉去つてその後いまだ年暮れず

蕪村

この句はいふまでもなく芭蕉の句の「年暮れぬ笠着て草鞋穿きながら」に對しての唱和吟でありまして、芭蕉賞揚の意が大いにあらはれてゐて、蕪村が芭蕉を偉大と見てゐたことは、これらの句だけによつても明らかに判るのであります。その他の作品の上にも、芭蕉及びその周囲の人々の作品の概念が、潜在意識となつて、しらすくの間には擡頭して來たと見らるゝべき作品が、相當に見出されるのであります。即ち

草臥れて宿かるころや藤の花

芭蕉

草臥れて物乞ふ宿や朧月

蕪村

この道や行く人なしに秋の暮
門を出れば我も行人秋の暮

芭蕉
蕪村

遅う暮るゝ日も今日ぎりの別れかな 杉風

また長うなる日に春の限りかな 蕪村

なつかしき津守の里の若葉かな 牧童

なつかしを津守の里や田螺あへ 蕪村

佛法を裸にしたる佛かな 許六

灌佛は裸をしめすはじめかな 蕪村

などそれでありまして、なほ

笛の音に波もよりくる須磨の秋 蕪村

は芭蕉の「須磨寺や吹かぬ笛きく木下閣」と「淋しさは須磨にかちたる濱の秋」に聯想しての作品であることは見逃せませんし

木曾路行ていざとしよらん秋ひとり 蕪村

は芭蕉の「送られつ送りつはては木曾の秋」にその源流がありはしないかと考へらるゝのであります。又

我を厭ふ隣家の寒夜に鍋を鳴らす 蕪村

詫 禪師 乾 鮭に白頭の吟を彫る 同

の如き談林調とも見られるべき作品も見ることが出来るのでありまして、斯の如く芭蕉を崇拜し、元祿の作風を慕ひ、又談林調を忘れてをらないところが、頗る明瞭ではありますが、蕪村の俳句の大局から見ますれば、それは非常な小数の異例に過ぎないのであります。しかも芭蕉には全く無それらによつて左右されるべきものでないと斷言出来得るのであります。しかも芭蕉には全く無いものを蕪村の作品によつて見出し得るといふ事は、何よりも天明俳句の創造の尊いものでなくてはならないのであります。

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月 蕪村
 春雨にぬれつゝ屋根の毛氈かな 同
 春の海ひねもすのたりくかな 同
 日は日くれよ夜は夜明けよと鳴く蛙 同
 五月雨や大河を前に家二軒 同
 小原女の五人揃うて袴かな 同
 古井戸や蚊にとぶ魚の音くらし 同
 絶頂の城たのもしき若葉かな 同
 かけくつて月もなくなる夜寒かな 同
 四五人に月落ちかゝる踊かな 同
 日は斜關屋の鎗に蜻蛉かな 同
 柳散り清水涸れ石ところく 同
 風や何に世渡る家五軒 同

てらくと石に日の照る枯野かな 同
 首くゝる縄切もなし年の暮 同
 入道のよゝとまゐりぬ納豆汁 同

これらの句に見る如く、その行くとして可ならざるなき縦横自在なる俳想は、寧ろ蕪村獨特のものでありませう。殊に

蕪村
 薬盗む女やは有るおぼろ月
 同
 ゆく春や選者をうらむ歌の主 同
 同
 春雨や同車の君がさゝめごと 同
 同
 句ひある衣も疊ます春の暮 同

かうした倦怠的ではありませんが、艶麗な趣をあらはしたのは、元祿の俳風に殆ど見る事が出来
 ないといつてもよい位の天明特有のものであらうと思ひます。

出る杭を打たうとしたりや柳かな
蚊・帳の内螢はなしてあゝ樂や
釣りあげし鱸の口や玉を吐く
飯粒で紙子のやぶれふたぎけり

蕪村

同

同

同

かうした季語のもつ特性に對してそれ／＼の配材と、あらはすに適當な表現法及び用語の撰擇の上に苦心の痕を見せてをるのであります。

朝日奈が曾我を訪ふ日や初鯉
繪團扇のそれも清十郎にお夏かな

蕪村

同

の如き古事や劇に興味を置いたもの

鞘走る友切丸やほとゝぎす

蕪村

この句の友切丸は源家重代の名刀であつたものを、曾我五郎が譲りうけて、それを持つて工藤

祐の假屋へ乗り込んだので、「鞘走る」によつて五郎の勇氣凜然たる有様と名劍の悽さを併せて現はし、それを「時鳥」といふ季語の特性に配材せしめ、さうして夜討の夜が恰度時鳥の鳴く頃であるといふ歴史の事實によつて、確實性を保たしめたところの用意周到な技巧は、實に驚くべき手腕であると考へらるゝのであります。と同時にかゝる作品が蕪村の句作態度の全般に渡つて脈を通じてゐるとも云へるのであります。蕪村と併稱され天明の作家で人事句を以て鳴る炭太祇、及び高井几董の二人はその最も雄なるものであります。

藪入の寝るや一人の親の前
春雨やうち身かゆがるすまひ取
川・風に水打ちながす晒かな
出代や厩の馬に暇乞
脱ぎすてゝ角力になりぬ草の上
法體を見せてまたきる頭巾かな
春雨や簑の下なる戀衣

太祇

同

同

同

同

同

几董

繪草紙に鎮おく店や春の風
夕立やよみがへりたる斃馬
山寺や縁の下なる苔清水
ひとり生えてひとつ生りたる瓢かな
書棚に鹽辛壺や冬籠

同 同 同 同 同

その他の作家を一覧いたしますれば

元日や草の戸越の麥島
朝東風に風賣る店を開きけり
禪に贈別の詩や九・月盡
旅人の桃折つて持つ節句かな
鯛を切る手もとにはしる霞かな
玉摺りのともし火寒き手元かな
火ともせばうら梅がちに見ゆるなり

召波
同 同 同 同 同
檮良
同 同 同
曉臺

大空にかりがねくらし春の月
犬の聲しばし里ありてむら薄
清水湧くみなもと見えて梨の花
五月雨やある夜ひそかに松の月
あら磯や月うち上げて青嵐

同 同 同 同
同 同 同 同
同 同 同 同
同 同 同 同

元祿の俳句があくまで閑寂を旨とした自然靜觀俳句であるに比較して、天明の俳句は季語の特性に對して一つの境地を作らうとし、その結果、艶麗と色彩に富んだ作品を多く見るに至つたものであつて、蕪村を主とし、人事句に秀でたる太祇を別格とし、几董召波によつて元祿に對しての天明調が生れるに至りました。

かくして奥行の深い元祿の作品と、間口の廣い天明の作品と相俟つて俳句といふ一つの殿堂が築かれるに至つたのであります。

一茶時代

一茶は幼少の時母に死別し、繼母に育てられたのが繼母に實子が出来てから一茶の心境に一變化を來し、彼六才の時に

おれと來てあそべや親のない雀 一茶

と口吟んだ如く、孤獨によるところの同情が、小鳥の上によせられた境涯を示してをります、さうして次第に成長するに従つて、繼母繼子といふ不幸なる大きな溝が、彼には斷崖絶壁と變り、遂に一種の性癖の持主として、その一面は繼母や異母弟に對する憎惡觀念となり、その一面小禽小草などへの同情愛となつて終生までその二つは融合しなかつたのであります。

まゝつ子や涼み仕事に藁を打つ 一茶
まゝつ子やつきだらけなる風 同

又むだに口あく鳥のまゝ子かな 一茶

この句の如く繼子として育まれ來つた性癖を露骨にあらはし、また

缺鍋も朝日さすなりこれも春 一茶
我門や螢をやどす草もなし 同
秋の風宿なし烏ふかれたり 同
飯櫃に着せれば蒲團なかりけり 同

これらの句を見ると、彼の逆境がそれ／＼にあらはれてをるのであります。さうして繼母と異母弟に對する憎惡觀念が

ふるさとはよるとさはると茨の花 一茶
故郷は蠅まで人を刺しにけり 同

これらの句となつてあられてゐるのに反して

門かすぞ鳴かずにあそべ雀の子 一 茶
 子子よ精出してふれあすは盆 同
 撫子に二文が水を浴せけり 同
 晝飯をたべにおりたる雲雀かな 同

この句の如く、彼の性癖の一面は小禽や小蟲或は草花に對して同情愛となつて現はれてをるの
 であります。

元日や上々吉の淺黄空 一 茶
 けろりんくわんとして鴉と柳かな 同
 堪忍をいたしにゆくや花の蔭 同
 夕月や大肌ぬいでかたつむり 同
 やれ打つな蠅が手をする足をする 同
 人來たら蛙になれよ冷し瓜 同

惣領の甚太郎どのゝ糸瓜かな 一 茶
 天津雁おれが松にはおりぬなり 同
 やあしばらく蟬だまれ初時雨 同
 木枯や雀も口につかはるゝ 同

これらの句に見る如く、主觀的でその表現が無雜作で、用語が方言俗語を遠慮なく用ひ、滑
 稽、諧謔、奇抜、の中にどこまでも彼の性癖はつきまつてゐることが窺知出来るのでありま
 す。さうして

子子や小便無用くくとて 一 茶
 べらぼうに日が永いかなく 同
 きりくす聲が若いぞくぞよ 同
 むまさうな雪がふうはりくと 同

の如く殆ど俳句として全く無價値な作品も亦平氣で詠じてゐるところに、一茶の一面を見るこ

とが出来るのであります。繼母や異母弟に虐げられた一茶ではありましたが、彼はその反動として故郷を忘れなかつたのであります。

霞む日も雪の上なる住居かな 一茶
蟬鳴くや天にひつつく筑摩川 同
信濃では月と佛とおらが蕎麥 同
雪舟引や屋根からおとす届状 同

かくの如く郷土愛の念に燃えた彼の一面を窺ふことが出来るのであります。さうしてなほ彼の句にこんな作もあります

嗅いで見てよしにするなり猫の戀 一茶
尻をひつてしやあくとして草の蟲 同
門松や本町筋の夜の雨 同
母親を霜よけにして寝た子かな 同

これらの句で見る如く、第一句の興ざめ、第二句の駄落酒、第三句の眞面目、第四句の本格的、かうした内容といひ、形式といひ、一見無定見そのものゝ如き放縦さであることが知らるゝのであります。

然レ乍ら一茶の句全般に渡つてあらはれるところの強い主観と境涯のあらはれは、見逃すことの出来ない事實でありまして、これらのものが芭蕉や蕪村の作品に見ることの出来得ないのであらうと思はれるのであります。

善光寺

開帳に逢ふや雀も親子連 一茶
晝めしをたべにおりたる雲雀かな 同
陽炎や蕎麥屋が前の箸の山 同
蟬鳴くや天にひつつく筑摩川 同
露置くや茶腹で越ゆるうつ山 同
旅人の垣根にはさむ落穂かな 同

一人旅

次の間の灯で膝につく寒さかな

同

これらの句はいづれも一茶の佳作でありまして、彼の境涯がよく自然と一枚になるの境を示してをる、得がたい作品であらうと思ひます。

一茶の性格からして天明時代の俳句の艶麗な趣と共通する點は、全くといつてもいい位、それを見出すことが出来ないのではありませんが、元祿時代の作風にはかなり多くこれを見る事が出来るのであります。先づ

芭蕉様の 臍をかちつて夕涼み

一茶

芭蕉塚まづ拜むなり初紙子

同

この句では芭蕉をかなり絶對視してをることが判ります。また

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

芭蕉

月の梅酢の蒟蒻のと今日も過ぎぬ
我宿は蚊のちいさきを馳走かな
我宿は口でふいても出る蚊かな

一茶

芭蕉

一茶

の如き類型のものを見ることが出来ますが、其角にいたりますと一層それが濃厚に出てゐるのであります。

鶯の身を逆に初音かな
鶯の身を逆に初音どん
夕立や田を三圍の神ならば
十五夜や田を三めぐりの神の前
たが爲ぞ朝起晝寝夕涼
我宿は朝霧晝霧夜霧かな

其角

一茶

其角

一茶

其角

一茶

四十から小夜の中山五十から
旅で年とるや四十雀五十雀
其角
一茶

この外にもまだ多くをみるのですが、如何に一茶が其角の作風を學んだかといふ事が判
るのであります、一茶の句調の胚胎は其角の影響にあるといつてもいい位であります。

一茶と前後した俳人中に特に大書すべき特色をもつた作家は見られないのであります、俳人
は相當多くあつたのであります。

明星やしめ野の雲雀巢にぞ鳴く
むら松や消えむとしては行く螢
組みかけし塔むつかしや冬木立
日ざかりをしづかに麻の匂かな
乗りかけの角力に逢へり宇津の山
樓高く寒夜に聲をさらすべく
夕暮や飼猿かりて梅の月
白雄
同
同
大江丸
同
同
蘭更

夏草やところくくに放れ駒
冬されや鼠のむしる壁の薦
雨ぐもに腹のふくるゝ蛙かな
時鳥ほとゝぎすとて明けにけり
ぬぎすての笠着て啼くやきりくす
笠きれば一重へだゝる雲雀かな
行く春や花によごれし荷ひ茶屋
我門へ尻の近よる田植かな
ひとり来て麥刈る松の夕日かな
秋立つと人は云はねど小野の奥
月高く雁がね低し淡路島
苗松とひとにつ育つ杉葉かな
足弱の杖にからまる眞葛かな
柞原薪樵るなり秋の暮
同
同
千代女
同
同
也有
同
同
同
士朗
同
同
巢兆
同
同

蝶まふや薪一把も門ふさげ
 古舟を焼きたるあとや芥子の花
 かりそめや壁に釘うつ靈祭
 鶉籠あむ川添村や桃の花
 山鳩のふくれ音にして若葉かな
 松魚むす浦の煙や秋の風
 たんぼゝや瀧よりうへの里の春
 晝顔や鞠子の汁もなき時分
 蠅もゐぬ峠の家や九月盡
 垣根田の蘭も刈りそめや夏の來る
 なぎの花こんにやくの花後の月
 雪に樵る翁もひとり簑と笠

成美
 同
 同
 完來
 同
 同
 道彦
 同
 同
 乙二
 同
 同

これらによつてその大方を知ることが出來やうと思ひます。

俳句の變遷(二)

子規時代

子規が俳句の革新を叫んで、その作品をはじめて世の中に公にしましたのは、明治二十六年三月新聞「日本」に発表したのがはじめてであります。碧梧桐著の「子規の第一歩」を見ますと明治二十四年の秋

一ツ家はすゝきにくれてなく鶉
 菜を洗ふ小川の濁や蓼のはな
 哀れしれと門もとさゝぬ砧かな

子規
 同
 同

甘からず酸からず酸漿の實や秋の味

同

218

これらの句が見えるのであります。さうして、碧梧桐は青桐といふ號であつたし、虚子は高清といふ假號から、はじめて虚子に變つた年であるのであります。更に翌年二十五年の夏、子規は暑中休暇を利用して故郷松山に歸り、青桐より梧桐に變つた碧梧桐、虚子、可南、女月、非風、明庵など、句作をしてをるのであります。

梅干や夕顔ひらくやねの上 子規

打ちあげた水風蘭に届きけり 同

晝かほは蝶のあそばぬさかり哉 同

蟲干や花見月見の衣の數 同

などを示してをります。二十五年の冬子規が新聞「日本」の記者として入社し、その翌年鳴雪が蕪村句集を入手するに至るや、子規を中心として蕪村研究に全力を擧げるに至つたのであります。子規はその著「俳人蕪村」に於いて

「芭蕉が創造の功は俳諧史上特筆すべき者たること論を俟ず。此點に於いて何人能く之に凌駕せん。芭蕉の俳句は變化多き處に於て、雄渾なる處に於て、高雅なる處に於て、俳句界第一流の人たるを得。此俳句は其創業の力より得たる名譽を加へて無上の賞讃を博したれども、余より見れば其賞讃は俳句の價値に對して過分の賞讃たるを認めざるを得ず。」

と述べてをります如く、子規の蕪村賞讃は、芭蕉以上とまで書かれるに至つたのであります。これはあなたがち蕪村の俳句が、芭蕉の俳句より以上に藝術として價値あるものといふ考へ方をするより、芭蕉の名聲が昔よりやかましく傳へられたのに對して、蕪村は畫人としてのみ知るものゝ外、俳人として蕪村を知るものがなかつたので、蕪村を解せざる蕪村以後の無學者に對し、又百年後の子規等によつて蕪村の眞價を知り得た喜びからして、かく比較賞揚したものと見るべき一面をも考へて然るべきものであります。しかし乍ら、子規の比較論に

「若葉して御目の雫ぬぐはばや 芭蕉

あらたふと青葉若葉の日の光 同

の如き皆季の景物として應用したるに過ぎず。蕪村には直に若葉を詠じたるもの十餘句あり

219

皆若葉の趣味を發揮せり。例

山にそうて小舟漕ぎゆく若葉かな
蚊帳を出て奈良を立ちゆく若葉かな
富士一つ埋み残して若葉かな
窓の灯の梢に上る若葉かな
絶頂の城たのもしき若葉かな

以下略

雲の峰の句を比較せんに

ひらくとあぐる扇や雲の峰	芭蕉
雲の峯いくつ崩れて月の山	同
湖や暑さを惜む雲の峯	同

月山の句稍々力強けれど猶蕪村のに比すべくもあらず蕪村の句多からずといへども

楊州の津も見えそめて雲の峰
雲の峯四澤の水の濁れてより
廿日路の背中にたつや雲の峯

の如き皆十分の力あるを覺ゆ。(中略)櫻の句は蕪村よりも芭蕉に多し。しかも櫻のうつくしき趣を詠み出でたるは

四方より花吹き入れて鳩の海	芭蕉
木のもとに汁も膾も櫻かな	同
しばらくは花の上なる月夜かな	同
奈良七重七堂伽藍八重櫻	同

の如きに過ぎず。蕪村に至りては

阿古久曾のさしぬき振ふ落花かな

花に舞はで歸るさ憎し白拍子
花の幕兼好を覗く女あり

の如き妖艶を極めたるものあり。」

とかういつて子規のいふ芭蕉の消極的美に對して、蕪村の積極的美の比較を論じてをります。その消極美積極美につきましては、「積極美とはその意匠の壯大、雄渾、勁健、艶麗、活潑、奇警なるをいひ、消極的美とは其の意匠の古雅、幽玄、悲惨、沈靜、平易なるものをいふ。」と子規は述べてをります。成程芭蕉の作品には子規の云ふ消極美なる作品の多いことは認めらるゝのであります。又

荒海や佐渡に横たふ天の川 芭蕉
一つ家に遊女と寝たり萩と月 同
蘭の香や蝶の翅にたきん薫す 同
あらたふと青葉若葉の日の光 同

の如き子規のいふ積極的美に類するものも、多々あるのでありますから、これは程度の問題であります。必ずしも斷言は出來得ないものゝやうに考へられます。そして子規のいふ美とは俳句の表面上のみにはあらはれたるものゝみの美の義でありまして、所謂間口としての美を論じたもので、その奥行としての美學論には觸れてをらないのであります。印象的の美のみを見て、象徴的の美を見ることが浅かつたかの感があるのであります。従つて

故主蟬吟公の庭前にて

さまざまのことと思ひ出す櫻かな 芭蕉

この句のやうな眼前に咲いてゐる櫻の花を見て、さまざまの事を象徴しやうとした奥行の美を見ることをしなかつたのであります。されば子規自身の俳句も蕪村研究後は平明的より更に繪畫的色彩を多くおび、さうして

「新俳句編纂より今日に至る僅に三四年に過ぎざれども其間に於ける我一個又は一團體が俳句上の經歷は必ずしも一變再度に止まらず。しかも一般俳句界を概括して之を言へば「蕪村調成功の時期」とも云ふべきか。蕪村崇拜の聲は早くも已に明治廿八九年の頃に盛なりしかど實際

蕪村調とおぼしき句の多く出でたるは明治卅年以後の事なるべし。而して今日蕪村調成功の時期といふも他日より見れば如何なるべきか固より知る能はず。太祇蕪村召波几童等を學びし結果は嘗に新趣味を加へたるのみならず言ひ廻しに自在を得て複雑なる事物を能く料理するに至り、従ひてこれまで捨て、取らざりし人事を好んで材料と爲すの異觀を呈せり。これ余が曾て唱道したる「俳句は天然を詠するに適して人事を詠するに適せず」といふ議論を事實的に打破したるが如し。」

とその序文に述べてゐる句集が「春夏秋冬」であります。天保時代に墮落したところの俳句を寫生によつて革新に努めた子規が、太祇蕪村の研究によつて、その初論を覆したことは、今日から見て注目し價する問題であらうと思ふのであります。

魚市に魚のすくなき餘寒かな 子規
絲のべて風の尾垂るゝ水田かな 同
梅散るや海苔干す磯の汐曇 同
晝寝さめて湖畔の森にあそびけり 同

夏羽織我をはなれて飛ばんとす 同
夏山を出て善光寺平かな 同
取にくる鐘つき料や秋の暮 同
七浦の夕雲赤し鰯引 同
大水の引いて雨なし秋の空 同
大船の中を漕ぎ出し寒さかな 同
口こはき馬に乗つたる霞かな 同
風や芭蕉の緑吹きつくす 同

これらの句は在來の子規の事物を端的に寫すといふ獨特な句風を示してをるのでありますが、次の句に至りますと、全く蕪村の影響が濃厚にあらはれてをるのであります。

高麗船の來るとばかりに日永かな 子規
物にすねて揚屋出る夜の朧かな 同
春雨や傘さして見る繪草紙屋 同

行く春の烏帽子買ひけり白拍子 同
 五月雨大井の橋はなかりけり 同
 水草の花の白さよ宵の雨 同
 鳩吹きや寺領の畑の柿林 同
 山門をぎいと鎖すや秋の暮 同
 芒伏し萩折れ野分晴れにけり 同
 老僧は人に非ず乾鮭は魚にあらず 同
 酔うて吟す東披の頭巾脱げんとす 同
 蓬來の陰や鼠のさゝめ言 同

これらの句はその一々に就いての説明は要しないのでありますが、その内容といひ表現口調にいたりますまで蕪村を學んだものであるといふ事が明かに判るのであります。そして「人事を好んで材料と」してをりましても、太祇の人事句などとはその質に於いてかなり距りがあると思へますし、蕪村の作品に之を見ますれば勿論それ以上に距りのあることは否むことの出来ない事實

でありまして、惟ふに外殻だけの摸倣に過ぎなく、その本質と見らるゝものは子規自身のもつてゐる平單明快な内容であると考へらるゝのであります。

假りに俳句の内容を二大分しまして、一つを平面美によるもの一つを立體美によるもの、芭蕉、一茶をして立體美的詩人とすれば蕪村、子規は平面的美詩人といふ事が出來得ませう。しかし乍ら子規が俳句に平面美を禮讚したのは、常に子規個人の問題でなく、當時の一般藝術觀賞の態度から考へても、しかくあるべき事でありまして、従つて子規の美術に對する觀賞眼からして、芭蕉の俳句より蕪村の俳句の方に、多くの共鳴を見出されたことになつたものであらうと考へらるるのであります。

子規の芭蕉研究は、幽玄とか閑寂といふ意味は勿論解つてをつたに相違ありませんが、その幽玄閑寂が東洋藝術としての極致であり、又美の最高なるものといふ事まで判つてをつたかどうか、その邊にはまだ多く研究の餘地がある問題だと思はるのであります。子規はその病臥によつて反動的生活のあらはれとして、芭蕉の如き幽玄閑寂を旨とする藝術境を探ぐる事は、煩はしさに堪へられなかつたものと推定せらるゝのであります、あくまで活動力の旺盛は、事物を靜觀するといふことに暇なく、俳壇、歌壇、文壇、畫壇、或は政治へまでも、正しき批判の大斧を振つ

た勇者でありまして、この功績こそ眞に子規の偉大さを物語るもので、その俳句、その歌などはそれらの藝術批判への副産物と見ても、子規の功績に對して毫も支障のないことであらうと考へらるゝのであります。

子規が明治俳壇の革新に努めてから、共にその仕事を扶け、しかも作家としては子規以上の手腕を振つたのは碧梧桐でありませう。子規も明治二十六年の碧梧桐の作品を評して「此時は碧梧桐が思想に於て奇抜なる、句法に於いて老成したる時代なり。實に此時代は吾人は思想の如く奇抜ならず、吾人の句法此の如く變化せず此の如く老熟せざりしなり。」と碧梧桐の作品に對して、自己を告白してをる通り、子規の平面的美から見れば碧梧桐の作品に多く見る如き屈曲美には、少からず驚かされるものがあります。

春風や道標元祿四年なり 碧梧桐
桃咲くや湖水のへりの十箇付 同
上京や友禪洗ふ春の水 同
境に入つて國の禮問ふ霞かな 同

雲の峰葱の坊主の兀と立つ 同
街道に馬士の喧嘩や麥の秋 同
墓多き小寺の垣や花木僅 同
赤い椿白い椿と落ちにけり 同
水飯の水こぼしけり膳の上 同
貧乏な青物店や夏大根 同

その構想といひその表現法といひ、獨自の境地を拓いた自由自在さが見えるのであります。碧梧桐と同時に子規の教訓をうけた一人としての虚子の作品にも、當時のものには見るべきものがあります。

裏道の橙赤し今朝の春 虚子
春雨の李夫人起きず香煙る 同
春の夕暮れなんとしては小雨ふる 同
金殿に灯ともす春の夕かな 同

鹽竈や狂女死ぬ夜の朧月 同
 焼山の夕暮淋し知らぬ鳥 同
 風雲の梢ゆさぶる若葉かな 同
 野菊莖ねぢけ葉うら枯れて花細し 同
 此夕桐の葉皆になりけり 同
 草枯れて夕日にさはるものもなし 同
 爐塞いで此夕暮を如何ん僧 同

これらの句を評して子規は「二十七年は虚子が始めて詩神の幻影を拜したる時なり。俳句乳臭を脱して漸く老成の域に進まんとす。平易の中に趣味を寓する處に既に碧梧桐を超えたり。」といつてをりますが、「裏道の」の句を除いてはいづれも瞑想的で、句法も獨特のものがなく摸倣のそれでありまして、碧梧桐を超えたといふ事は、子規が虚子への鞭撻の意味の多くが含まれてゐるものと見ねばならないと思ひます。
 當時の作風を一覽して見ますれば

春雨や葎の宿の白柏子 鳴雪
 夏山の 大木倒す 衍かな 同
 初冬の 竹緑なり 詩仙堂 同
 馬の首人の首ゆく 菜種かな 飄亭
 青嵐の末は 阪東太郎かな 同
 冬木立犬吠えて 遠く里見えぬ 同
 曉や 湖上を 走る 青嵐 露月
 白馬馬に非すといへば 栗はねる 同
 はりつめし 氷の中の 巖かな 同
 蛸蜺小桶に 何を語るらん 紅緑
 夏菊は貧にして 且ついさぎよし 同
 君知るや 海鼠は 海の鼠なり 同
 朝顔を 思ひ出 草や 種の物 青々

乾 鮭 や 臥 龍 先 生 廬 を 出 で す 同
 け し は 皆 坊 主 に な り ぬ 時 鳥 竹 の 門
 百 韻 に 明 易 き 夜 の 灯 か な 同
 雨 三 日 犀 川 溢 れ 鮎 落 ち ぬ 同

これらの句を以て子規が明治俳壇革新の聲をあげ、一旦地に墮ちてしまった俳句をして、再び藝術の生命を吹き込んだ大きな意義ある仕事を實現せしめたものと見るのであります。

碧梧桐と其周圍

元祿に於きましても天明に於きましてもその主たる芭蕉、蕪村の歿後は直門の活躍以外には甚だ振はざる傾向が、そのいづれの時代を通じても見えるのであります。明治の子規歿後はその例を破つて、碧梧桐時代に至つて一層隆盛を示したかの感があるのであります。これは一度び子規の俳句革新論が世の中に傳はるや、その正しき批判と藝術として蘇つた作品は、當時の文化に

よつて津々浦々にまでも普遍され、それが子規早世によつて自然消滅の悲運に至るべきを、天才碧梧桐によつて、子規の蒔いた種は育まれ、更に絢爛たる日本俳句の花を開くに至つたのであります。「續春夏秋冬」が即ちそれでありませう。そして一方碧梧桐は明治三十九年八月、日本全國の行脚に上つて、その收穫の大なるものをのこしたのであります。その著「三千里」が即ちそれでありませう。

夜 なが ら 鹽 すゝぎ や 蟲 の 聲 碧 梧 桐
 鳥 居 ある 方 に 上 れ ば 薄 か な 同
 秋 雨 や 俵 あ む 日 の 藁 一 駄 同
 飲 み 水 を 運 ぶ 月 夜 の 漁 村 か な 同
 夫 戀 ふ と 詠 み し 花 なる 野 菊 か な 同
 馬 遠 く 鳥 高 き 野 の 鳴 子 か な 同
 牧 場 に 近 き 池 なる 浮 寝 鳥 同
 革 羽 織 着 る 顔 に なる 己 か な 同

新傾向俳句

「新傾向俳句」といふ名稱は最初乙字が唱へたといふ事が、その著「乙字俳論集」に見らるゝのでありまして、乙字のいふ新傾向俳句とは、「續春夏秋冬」の作品に見るが如きをいふのでありますが、碧梧桐の主張する新傾向俳句といふのは、同氏が日本全國行脚が第二期に入り、旅行そのものに馴れ切つてしまつて、自然に接しても感興が乏しくなり、寧ろ人事の上に興味を見出すといふやうな態度が明らかになり、一方題詠の濫作から季語に對する聯想範圍が、俳句の本質以外のものまで取入れらるゝやうになり、次第に複雑となり混雜となり、一つは散文的の一つは思想的の一つは小説的に一つは哲學的に傾きかけて來たのであります。

古戦記を花野小寺の縁起かな

天 郎

順路とらぬ多峰詣で置く扇かな

百花羞

ひだるさも旅馴れて雁仰ぐ空

櫻魄子

話頭袖味噲に及べば主經營す

碧梧桐

これらの句の如く、一句の上に時間的經過を多分に見る散文に近づかんとしたるもの

歸山思ふ時蜻蛉に笠淋し

櫻魄子

我が思ひ盲者に似たり薬掘

月隣生

家運云々すれば柳の散りそむる

山梔子

蘭の香や女に傳へたる祖父の學

洋々

これらの句の如きいづれも思想的に入つたもの

妓は皆舸夫を情人や小夜千鳥

六花

人買ひの蕎麥白き里を落ちにけり

八重櫻

香焚いて人の自刃や春の雨

櫻魄子

水鳥や人質ながら夜々の宴

樂堂

これらの句に見る如きその内容の小説的なるもの

川だちは川で果つといふを病む蒲團 牛歩
生きる春に餘寒あり死ぬ冬に小春あり 雷死久

かくの如き哲學的分子を含んだものをも見るやうになつたのであります。さうして

悪鬼追ふ善鬼が叫び野分かな 師竹
銀杏や會上八萬四千の顛 六花
風神の裾すり庭や鷓鴣 告水
裸火を見せまじきものに閑古鳥 櫻碗子

一見季語と配材されたる分子とが、如何なる關係にあるか判らない程季語聯想の範圍が廣くなつたのであります。配材さるゝ他分子の事柄の興味に目的があるのでありますから、季語はついたりとも見られるのであります。さうして更に

門標たがへるに五月雨田舟揚げてあり 鶉平
我が死ぬ家柿の木ありて花野見ゆ 一碧樓
壁干すと焚く火にや砧打ち打たぬ 堇哉
雨の花野來しが母屋に長居せり 響也

この如き散文的無中心俳句となつて行つたのであります。かうなつてくると行けどくその目的無きが如くでありまして、その結果遂ひに一轉化を示すに至つたのであります。

煤を掃く床下の廣さのまひる 一碧樓
冴返る門の屋根鴉脚かけたり 折柴
葱畑にづかくと霜下りたる 圭不英

この如き感覺を直叙しやうとしたものに對して、碧梧桐氏は「かやうな自己の眞實性を詐らない、出來得るだけ情趣の動くまゝな自由な表現をしようとする態度を、假りに直接的表現と言つて置き度いのである。」とかう云つてをられるのであります。茲に於いて明治の「日本俳句」は

新傾向によつて、全くその本質を異にするに至りました。

華かなりし明治俳壇が、明治末期から大正昭和へかけてかくの如き激變を見るに至りました事は、子規のいふ積極美を尊んだ俳句が、旺盛なる句作力によつてその範圍が廣汎に流れた結果の分裂による破綻と見らるゝのでありまして、その歸結としては悲しむべき現象でありましたが、一方又かゝる熱烈なる句作態度が、渾然としたところの明治俳句を創り出したといふ事にもなるのであります。

虚子と其周圍

子規歿後碧梧桐が日本俳句隆盛時代を出現いたしました頃、碧梧桐と並んで子規の最も早い門下であつた虚子は、一時俳壇に遠ざかつて専ら小説の方に力を入れてをつたのでありますが、再び子規が創刊した雑誌「ホトトギス」に依つてその作品を發表するやうになつたのであります。

春月や鏡の如く露廣葉	虚子
芝を焼く子町を焼く大鹽平八郎	同
雛の灯を相隔てゝぞ木深けれ	同
蠅一つ何によつてか生れけん	同
梅既に散りたる村に這入りけり	同
後妻の菖蒲枕の高さかな	同
浴衣着て其の紺に白粉白し	同
腹當や汝が母の年若し	同
蛇擲てば板に當りて長さかな	同
京の町の夜長の窓や歩きけり	同
曼珠沙華野山に消えて冬近し	同
芒刈りて之を束ねる男かな	同
霜の香にいためし鼻を爐によせし	同

大嶺の雪に張りそめし氷かな
同
餅の手をつゝみくれたる大いなる手
同

これらを見るのでありますが、子規在世當時既に見えてゐた胎胚が茲に来て漸く濃くなり、さうして小説から轉じて來た匂ひもかなり強くあらはれてをりまして、事物を解剖的に見るといふことが、これらの俳句に相當多くあらはれてゐるのであります。

その他の作家の句を見ますれば

白音も大嶺應ふ彌生かな
蛇笏
反逆にくみせず讀むや野火の窓
同
秋風や磊碗として父子の情
同
春寒やぶつかりありく盲犬
鬼城
道端や繩垣したる蕎麥の花
同
爐開や藪にきりたる蔓もどき
同
春の夜や戸閉めし店の鯛蝶
石鼎

鶯王と廊下にかけて附音かな
同
蔓高く上下す蟻や天碧落
同
時計臺に春夕早ともりけり
青峰
苗代田に幣白々と夜明けたり
同
掛乞の橋に來て心定まれり
同
永き日や松くもりたる俳句會
月舟
落城の旗見つゝつけし鮮を食へ
同
鳴く牛へ煤煙長し枯野原
同
行春の空の廣さや豆の花
零餘子
掃かれしあとに落葉濃かや焚火燃ゆ
同
葱汁煮えて慌しく灯すランプかな
同
灯るまでの心あてなし春の雨
水巴
沼の鴨にいにしへの月や町灯る
同
今日も暮るゝ地に響なし寒雀
同

石ころも雑魚と煮ゆるや春の雨 普 羅
 夜長人耶蘇をけなして歸りけり 同
 まだ賭けぬ我が肉や秋の風 同
 雪解のはねとぶ泥や松並木 泊 雲
 蛇のとぐるほどきぬ百合の花 同
 枝戦へど幹しづかなる野分かな 同
 草萌や讀む新聞を犬が踏む 躑 躑
 我の折るに忍びぬ菊を子の折りし 同
 枯野人妻とられたる軌道行く 同

この外に梧月、村家、左衛門、俳小星、泊月、雉子郎、野鳥、土音の諸氏がありますが、日本俳句の行く道とホトトギス派の行く道は、碧梧桐の道と虚子の道と異なるやうに異つてをりまして、これは當然過ぎる程當然な事でありますが、しかし、かく相隔つた句境を見る時、各自の個性に觸れたもの以外に、俳文學に對して相當の見界の相違があるものと考へらるゝのであります。

これらの作品に就いては「乙字俳論集」中に於て論じれてをりますから、その一節を抄出して見る事にいたします。

「秋風に殺すと來る人もがな 石 鼎
 一人の強者唯出よ秋の風 虚 子

龍虎の圖の傑れたるは意力を表現したものである。其れ等は龍虎の姿態と雲雨風電の明暗とに依て情趣が具象化されて居るのである。然るに此等の句は何等の具象性をも帯びず、單に作者の意志が述べてある。最も作者は平常「秋風」といふ季語の歴史的感想に馴され、斯くいふ作者其人の氣分の象徴たる秋風に逢遇したのであるから、單に意志を述べたのでなく、更に一歩退いて自己を自然に包容して見て居るのであるといふのだらう。作意は固よりさうである。けれども象徴は象徴として即ち固定のものとして之を用ひたる場合と、知らず識らず象徴とも見らるゝ結果になつて居た場合とは非常の相違がある。一は概念に墮してをり、一は生々たる命が籠る。今茲の秋風も、官能的に訴へる外わ何物もなく、ものゝ凋落と淋しき氣分との概念的象徴として用ひられたのであるから、氣分の色付を試みたに過ぎないのである。此の如き概

念的象徴としての自然を假り來る句作態度は斷然改む可きである。

竈火赫とたゞ秋風の妻を見る

蛇笏

これは意志表示ではないが、概念的象徴したる點は等しい。同類の句甚だ多い。(中略)更に注目すべきは感覺的廢類的作風の交れる事である。末梢神經の顫動にも全生命を感ずるといつたような、而もその瞑想によつて強められたる幻覺を詠するのである。新傾向の末路から立つた一派にも之と全く同境地の者がある。それ等は皆西洋かぶれの近代的なるを得意にしてゐるのである。

つぶらなる汝が眼吻はなん露の秋

蛇笏

冬の夜や土間に吸はるゝ死鶏の呼吸

思桂

虚子氏の主観的といふ事も之を解剖すれば幾種かの傾向を包藏してゐるが、之を蔽へば作意空想を加へて物を観るといふ事に歸する。情意の動くところ自然に對して感動する其心理的現象を主観と名づくるならば、主観なき句は有る可からざる筈にして、虚子氏の主観は非藝術的

不純分子多き故に僕は彼の提唱を斥くるものである。」

と斯く述べてをるのであります。さうして當時のホトトギスの一作者である鬼城の作品に對して、その「鬼城句集」の序文に

「芭蕉を俳聖と呼ぶ所以のものは、彼の句に其境涯より出で、對自然の靜觀に入つてゐるものが多いからである。明治以後隨分作者も多いけれど、境涯の句を成し得るものに至つては寥々として數ふるばかり、而も一人四五句を有すれば以て生涯の誇りとするに足る。(中略)古來境涯の句を作つたものは芭蕉を除いては僅に一茶あるのみで其餘の輩は多く言ふに足らない。然るに明治大正の御代に出で、能く芭蕉に追隨し一茶よりも句品の優つた作者がある。實にわが村上鬼城氏其人である。

夏草に這上りたる拾蠶かな

鬼城

小春日や石を嚙みゐる赤蜻蛉

同

瘦馬にあはれ灸や小六月

同

小鳥この頃音もさせずに來てをりぬ

同

この小鳥こそ氏の獨坐愁を抱く懷情そのままの姿ではないか。氏杉風を評して「質を以て文に勝ち」といひ「苦吟鬼神愁」といふ語を借られたが、うつして以て氏の作風を評すべきである。僕謂ふ、鬼城氏は作者として杉風を凌駕するのみならず、實に明治大正俳壇の第一人者なりと。」

序文も句も相當に原文とは省略してあることを斷つておきますが、斯の如くに乙字は述べてをります。以て乙字の當時の批判的態度が如何に公平超然としてゐたか、察せらるゝと同時に、當時の鬼城の作品はホトトギスは勿論一般俳壇の上に、稀有に近い位置にあつたのでありまして、之を見出して世に紹介したのは乙字の炯眼そのものに外ならないと信じられます。

乙字と其周圍

碧梧桐や井泉水等の俳句新運動である、新傾向俳句に對してその不可論を唱へたものは乙字でありまして、その頃乙字は蕪村研究のために等閑されてゐた芭蕉を研究し古俳句の精神を簡明して、我國土と俳句存在の關係を論理的に研究し、さうして淺薄なる西洋文學思想の影響によつて

動かされんとしてゐる、當時の新傾向俳句を徹頭徹尾排斥に努めたのであります。従つて當時の乙字の俳句に對する論は實に眞撃をきはめたものでありまして、それは實に國家を思ふの一念から起つた祖國主義の表現でもありました。

新傾向俳句と分裂後乙字が最初にその作品を發表しました大正六年に出版された句集「炬火」を見ることにします。この炬火は乙字删存亞浪の選輯であります。

十和田湖

朽葉一つとゞめぬ湖の底涼し 乙字

砂丘吹く風の砂立たず夏の月 同

天覽山

園を收む蜘蛛脚早し青嵐 同

葛の湯

夜雨しばしば照りきはまつて秋近し 同

一と渡しすれば日出つ行々子 同

高	原	や	風	は	ら	む	草	に	蟬	鳴	け	り	同
奥	牧	の	廣	さ	は	か	ら	れ	ず	天	の	川	同
月	山												
笹	床	を	月	照	ら	し	を	り	風	の	音		同
刈	株	に	穂	を	つ	ぐ	草	や	初	嵐			同
擦	り	魚	の	一	夜	に	見	え	ず	秋	の	水	同
木	搖	れ	な	き	夜	の	一	時	や	霜	の	聲	同
背	戸	鎖	し	て	か	ら	り	と	し	た	り	總	落
													葉
													同

これらの句に見る如く、明治の俳風とも異つた、所謂自然によつて動いてくる自己の感情を、何等のはからひもなく詠じ出すといふ、鬼貫のまことに適つたものを見ることは、蕪村にも、子規にも、碧梧桐にも見ることに出来ないものであらうと思ふのであります。即ち乙字はこの句集の序文に於いて「我等は必死の力を生活の更改に盡すべきは勿論であるが、故に其境に達せざれば味識し得ざる愛の感激を望んで止む時なき筈で、これは句作の根本修業である。而して之を表

現する言葉の習練に於ける努力は固より大切ではあるが、言葉が感情を飾るやうになれば墮落である。言葉よりも常に感情が優勢であり度い。」と述べてをるのであります。これは趣好を凝すことのみを重きを置き、そして言葉の撰擇に多くの工風をすることは俳句を作るものゝ本来の取るべき道ではないといふのであります、それは鬼貫のいふまことに反するものに等しいのであります。それ故に乙字は何よりも感情を表現法によつて變化させない手段を選ぶ事が、正しい俳句を作り出す一歩だと出張したのであります。當時の作風を見ますれば

燕	に	泥	よ	け	も	う	つ	二	月	か	な	竹	石
山	柴	と	一	様	に	櫻	刈	ら	れ	け	り	同	
こ	ゝ	刈	れ	ば	刈	ら	ぬ	田	に	押	す	蝨	か
種	桶	に	鼠	つ	き	た	る	臚	か	な		明	成
蠶	疲	れ	に	總	寝	の	晝	や	青	嵐		同	
蚊	の	中	に	白	ど	さ	つ	か	す	裸	か	同	
東	風	吹	い	て	箔	煤	洗	ふ	大	寺	か	三	幹
												竹	

魚波めば藻濁りの立つ春の水 同
 海月浮いて照る汐先や春の海 同
 初雷の鳴りなぐれ蠶棚つりゐたり 亞浪
 げんげ田や鋤くあとよりの浸り水 同
 老鷺に山獨活の盛花りなり 同
 門の邊に浪見に出でし遅日かな 冬葉
 荷あげ臺に波乗り來る蚊喰鳥 同
 下るほど山ふさぐ松や女郎花 同

季語による聯想の境に遊ぶことをしない、實感をそのまま詠ずることに努めてをるのであります。大地にしっかりと腰を落ちつけてゐて、少しも搖ぎのない又あぶなげのない出發點を見せてをるのであります。更に乙字歿後大正十年に冬葉の選になる乙字遺選集とも見らるゝべき句集「枯野」を見るなれば

行く雁の聲たてゝ沖は開けたり 乙字

嵐 山
 嵐氣動く奥は蟬聲晴れてあり 同
 上り見れば只草山や風月夜 同
 げんげんの咲かぬ隅より田打かな 月嶺
 蒸れ風や小雨聲なく茨散る 同
 川上はいづこ雪山塞ぎけり 同
 初蝶の白きを見づ接穂かな 蛻骨
 蝸の來て髪にくひ入る野分かな 同
 動きなき山姿風すさぶなり 同
 刈麥にまた來鳴きけり閑古鳥 竹石
 桑畑や空ら明りして秋の聲 同
 大寒や漬菜の中の氷嚙む 同
 誘ひよぶ草刈衆や明易き 佛丈
 石割りの煙臭つよし青嵐 同

寺に添うて家かたまれる枯野かな 同
花の奥ひねもす雷に暮れにけり 冬葉

駒ヶ岳

雷鳥の巢にぬくみある夕立かな 同
蜩や雲をふりぬく杉の雨 同

この外三幹竹、斗牛、有平、山梶子、蝶衣、柿葉、瑞光、九萬字、明成、亞浪、牛歩、鳥不
關、寒山、枯木、栖乙、句瑠璃、吐天、桐明、蕪洲、白蓉等の作品を見るのでありますが、日本
派と唱へらるゝ俳人が、その殆どといつてもいゝ位に碧梧桐又は井泉水等の唱導する新傾向俳句
といふ新名稱である短詩の旗下へ集つた中に、この新運動を潔しとせずして沈黙の形式を守る者
以外には乙字の唱へた、俳句は自然靜觀を旨とすべきもの、そしてその形式は國語のもつ音脚と
吾人の呼吸器の關係によつて、十七字内外を基調とすべきものといふ、主義主張のもとに參じ
て、芭蕉の俳句とその歩を同じうせんとしたのであります。

以上は日本派とホトトギス派との二大別の變遷に就いて述べたのでありますが、この外秋聲派

としての松宇の「にひはり」「筑波」麥人の「木太刀」畠石の「高潮」又日本派及びホトトギス派
から別れた句佛の「懸葵」青々の「倦鳥」水巴の「曲水」亞浪の「石楠」白水郎の「春泥」蛇笏
の「雲母」王城の「鹿笛」挿雲の「千鳥」徂春の「ゆく春」月斗の「同人」泊月の「山茶花」故
露月の「俳星」などの變遷に就いて記述せねばなりません。それらは紙数を許さない關係に
ありますので省く事にいたしました。又各氏の敬稱を省いた事をも併せて附記しておく次第であり
ます。

自由律俳句と其他

「層雲」及び「海紅」の俳句に就て

明治初期時代に作られた蘆花や紅葉の小説を現代から見れば、著しい懸隔と相異のある事に気がつくであります。従つて現代作られつゝある小説も百年の後にも、今日讀む蘆花の「不如歸」や紅葉の「金色夜叉」のやうな運命を有つてゐるものと考へるのは空想ばかりではなからうと思ふのであります。

然し乍らこれらの蘆花や紅葉と同時代に作られたところの子規の俳句のみは、今日讀んで見てもその價値は別として、少しも懸隔を感じないのは何が故でありますか、これは小説が主とし

て時代の渦中にゐる人事の葛藤を描寫するといふ藝術であるがために、その時代の移流に従つて作品も、時代的色彩を見るのでありますが、俳句は時代時代に拘はらぬところの天然自然の悠久感を詠むのでありますから、いつの世になつても不易であるのであります。

昭和七年七月號の雑誌「海紅」に田中海汀氏の「旅五月の手記」といふ文章の中に左の如き一節があります。

曉の戸を繰れば幅ひろき水べ

夕暮のあわたゞしいなかを宮島ゆき電車に乗る

玄海灘の鯛の白い肉のいろ

傘さして雨を送る變哲もない大勢の女の顔と聲

峯の茶屋の生卵子二つ

遙か浪の白きに一つの小鳥のいたいけに見ゆ

卓に凭れば船が切る浪の音さやけきに聞き入り

これら文章から抜いた一節が、井泉水や一碧樓等の主張する自由律俳句とするものとどれだけの相違がありませんか。

玄海灘の鯛の白い肉のいろ

峯の茶屋の生卵子二つ

などは井泉水の作として、氏一流の一理窟をつければつけられなくはない作品といへようと思ひます。假へこの手記なるものが普通の文章と異つた筆法で書かれてあるにしても、文章は文章であり、詩は詩としての氣韻や香氣を失つてはならないものであります。

火の見櫓や山は青くてかつこう

わが夏のしま萱のしげり

行水をあつうしてはいてゐた

ひまはり海をむいて雨の白浪立つ

梅雨ふり椎の木や樹々たのもしく

川べりわか葉柿がくれに七面鳥歩め

山を仰ぐ山のみどりにこゝろ悲しうする若者ととも

なんとなく茶種の莢に心ひかれをるあかときす

井泉水

逸郎

此君樓

酒壺洞

一碧樓

鶉平

櫻碗子

西亭

海汀氏の文章の一節と、これら層雲又は海紅の作品とその内容に形式にどれだけの相異を認める事が出来ませうか。

氏等の俳句に對する考へ方がこゝに陥入つたことは、詩としての内容づくるものと、詩への動機又は効果としての感情とを混同したものと見られるのでありまして、直感の内面的にも外的にも感激し、又直感に没入するときは強い感銘をうけるものでありますけれども、感情が詩歌の目的ではない筈であります。それを冠履轉倒して、たゞに感情をそゝる事のみ腐心するが故に、感覺主義になつたり、センチメンタルになつたりして藝術を冒瀆するのであらうと思はれるものであります。

「生活派」俳句に就いて

黒田忠次郎氏は「生活派俳句理論」の中で「表現の技術に就いて」の中でかう述べてをられます。

「表現の技術とは我々の思想感情の中に飽和されたるところの題材を、俳句形式として構成するところの、藝術手段をいふのである。それは従來俳句製作に就いて言はれてきたところの「叙法」とか「手法」と同じ意味をもつものである。が併し乍ら、従來俳句の上に呼ばれてきたところの「手法」或は「叙法」は俳句の約束—季題—十七字—切字等々の制約に就て、いかにそれが狭く、いかに小世界的技巧に陥つてゐたかを、我々は知らなければならぬ。」

乙字は曾て俳句の形式に就いては「形式より見たる俳句」「俳句の表現法と調子」「俳句の音調子に就いて」「俳句調子論」等を發表してをります。その他にも數へきれぬ程この問題について觸れてをります。さうしてこれらの論文は大正十一年十一月刊行の「乙字俳論集」に掲載されてあるのであります。もつと古い事をあげれば、子規の「俳諧大要」の俳句問答に於いて

「問—近頃の俳句を見るに十七字にあらで十八字十九字其外二十字にも餘れるなど少からず。それにて差支無きや。

答—差支あるか無きかは俳句の定義を附したる上ならでは論じ難し。若し十八字十九字の句にして俳句といふべからずといふ人あらば之を俳句といはずとも可なり。假に稱して十八字の新體詩、十九字の新體詩二十字の新體詩ともいはん。吾ははじめより俳句を作らんとて骨折るに非ず。只感情をあらはさんとて骨折るなり。其骨折りの結果が十七字となるか十八字と

なるかはた二十字以上となるかは豫期する所にあらず。」

と子規はかう明らかに述べてをるのでありまして、乙字はそれを一層論理的にしてをるのであります。然るところ、黒田氏にしても井泉水氏の場合にしても、自分の理論を公開せんとするに當りこれら子規乙字の所論には一切觸れずに、俳句は十七字であり又季題を詠み込まなければならぬ約束があるといふやうな、恐らく今日俳句に携はる者の何人と雖も許してゐないやう陳い文字にあらはれたことを、その唯一の相手として論じやうとしてをられるのであります。先づ氏等の生活派の俳句といふものを論ずる前に、この問題からして考へていたゞかなくてはならないと思ふのであります。子規なり乙字なりの論に對して研究し、さうしてその上に徐に筆をすゝめるべきではありませんまいか。でないと、現代の俳人が氏のいふ、俳句の約束—季題—十七字—切字といふやうな考への持主ばかりのやうに聞えるからであります。少くも子規を解し乙字を知る程の人々は、遺憾ながら氏等の指摘さるゝが如き約束に對して無理解でないからであります。若し一氏にして、俳句の約束—季題—十七字—切字といふやうに現代の俳句を解釋してをらるゝなれば、それは氏自身識らざるものを自ら發いてゐるのに過ぎないと思ひます。又自分等の立場への

論を説く方便として、月並者流の考へ方を相手としてをらるゝのなれば、我等の時代には拘はらぬところ、よろしく御奮戦を願ひ度いと云ふより外無いのであります。序でながら

子どもの貯金帳へボーナスから返して置け 忠次郎
ボーナス、夏服は我慢することにした 同

これらの作品を見て、かうしたものにして詩だと考へてをらるゝなれば、先づ以て詩とは如何なるものであるか、といふ定義論からはじめなくてはならない事になるのであります。それはここで解く必要はないと思ひます。

第一句—子供の貯金を必要があつたので臨時に通帳から引出して使つたのであるが、ボーナスを貰つたからその内で、子供の貯金の方へ借りた分を返しておけ

第二句—ボーナスを貰つたが、その内容はあまり豊かでない、それにあれもこれも必要なものもあるから、豫ねて作らうと思つてゐた夏服は我慢することにしよう。

かういふ意味で、ボーナスを貰つて、それによつて自分の生計のさまぐを考へたことがこの句の内容で、理智のはたらきがその末々までも行渡つてをつて、そのどこにも感情の世界が窺は

れないのであります。感情の世界以外に、成立つた詩といふものが存在せられたためしが、古來からあるかどうか、先づそれからの解決を待つ事にせねばなりません。

「詩徑」に曰く「詩は志の行く所、心にありては志、言に發きては詩、情中に動いて言に現はる之を言つて足らず、故に之を嗟嘆す、嗟嘆しても足らず、故に之を詠歌す、詠歌しても足らず、知らずして手は舞ひ足は踏むなり。」とあります。又今泉氏の言葉を借りて云へば

「詩歌とは韻律を以て言語をあやつり、この言語を媒質として、創作的想像の綜合作用により、生の新しい眞觀心像を作り、以て魂の姿心のそよぎを詮表したものである。」

「詩とは現實的な創造的想像と直感とを、言葉が韻律的な形をとつてあらはれる程に高潮した感情を以て、言葉に表現したものである。」

ポーナスの句のどこに高潮した感情が言葉となつて表現されてゐるかを、作者自ら考へられたるのであります。

「ホトトギズ」派の寫生俳句に就て

近來の俳句雜誌「ホトトギズ」の主張する寫生俳句なるものに就いて少し考察して見る事にいたします。

おかしさよ銃つきづ吹けば鴨かもの陰 青 畝

この句は、獵でとつた鴨を手にとつて見て、どこに銃彈の傷があるだらうと毛を吹いて探してゐると、鴨の陰部が見えたといふ、所謂物を解剖的に寫生したのであります。雉でも山鳥でも雁でもさしつかへないもので、鴨としての特性も何もあらはれてをらないのであります。この句を通じて感ぜらるゝ事は、生活の退屈さのやりどころのないといった、作者の姿が眼に浮ぶだけでありまして、かゝる事を句に詠ぜねばならぬといふ作者の倦怠生活から先づ以て改めなければならぬ事と思ひます。

狐火やまこと顔にもひとくさり 青 畝

狐火を見たといふ人の話をしてゐるのを寫生したものでありまして、嘘か眞か判らない話を、まこと顔して一席辯じたといふのであります。

人魂やまこと顔にもひとくさり
追剝やまこと顔にもひとくさり
夜詣でやまこと顔にもひとくさり

かうして見てもこの句の内容には少しも變りはないのでありまして、従つて作者が「狐火」でなければならぬといふ主張は斷じて通らないのであります。それはこの句の目的が「まこと顔にもひとくさり」にあるのでありますから、上五は何んでも恐しさうなものであればよいのでありまして、かゝる理智の念から作られた川柳にも等しき作品を俳句と考へてゐる事こそ、眞に今日の俳壇にとつて歎はしい事でありまして、誤まれたる寫生の末葉であると思ふのであります。その他

魂ぬけの小倉百人神の旅 青 畝
案山子翁あち見こち見みや芋嵐 同
口あいて矢大臣よし初詣 同

これらの句でも同様「魂ぬけの小倉百人」「案山子翁あちみこち見や」「口あいて矢大臣よし」等にこの句と詠じやうとする目的があつて、季語として「神の旅」「芋嵐」「初詣」などに對する必然的融合は少しも見られないのであります。

子規曰く「吾はじめより俳句を作らんとて骨折るに非ず、只吾感情をあらはさんとて骨折るなり。」と、俳句を作らんとするために「魂ぬけの」「あちみこちみ」「口あいて」など、技巧を弄するものからあそびになるのであります。「神の旅」「芋嵐」「初詣」等につれての感情の世界がこれらの句のどこに窺ふことが出来ようか、かゝる句を俳句として作り又選んだ者は、自己のために靜夜徐に考ふべき大切な事であらうと思ふのであります。

空蟬を妹が手にせり欲しと思ふ 誓子

女が蟬の殻を手に持つてゐるのを見て欲しいと思つた、といふのであります。たとへ事柄は平凡なことでも僅かな事でも、よしんば、一本の草の葉の動きであつても、それによつて作者の感情の動きがあればよいのであります。遺憾ながらこの句の場合では、感情の流れを汲む事が出来ないのであります。古典的に叙したところにごまかしとからくりがあつて、それによつて内容

を作らうとしてゐるもので

吾妹子が手にとりて見するうつせみのあまりに愛しも欲しとおもへり

かうした歌を折斷して俳句の形にしたものがこの句でありまして、従つて内容も表現法も不完全なる作品といはねばなりません。

避暑の宿まどみの洋燈暗けれど
三室山桑の葉黄ばむ道くれば
誓子
同

これらも一句として完全したものではないと思ひます。「暗けれど」「道くれば」といふ接續詞でとめたのでは、さてどうしたかといふ事になります。これが例りに

避暑の宿まどみの洋燈暗けれどわぎもとあれば心たらはし
三室山桑の葉黄ばむ道くれば夕さり鐘を鳴らす寺あり

かうして見て、もう一度前の句を見る時、俳句として獨立性が果してありませうか、感情を言

葉で飾ることすらとらざるべきが詩歌の道であるに、剩へ感情のない骸に對して古典的言葉を以て紛飾せしめるなど、斷じて許さざる句作法であらうと思ふのであります。

干菜見えて男やもめにあらざりき
馬車發つて垣に残れる干菜かな
干菜落ちて塀にもどさん人もなし
禪寺洞
同
同

鬼貫の「ひとりごと」に「俳諧に動くといふことはべり」といふ一節のある事は今更説きかへすまでもない事ではありますが、これらの句がたとへ實景を寫生したものでありましたにせよ、干菜としてそれに配材せられたる他分子との關係が、稀薄であつたり曖昧であつたりすれば、鬼貫の言葉に従はねばなりません。第一句は干菜が壁かどこかに吊してあるのを見て、この家の主は男やもめではないといつたものでありまして、これを

乾飯見えて男やもめにあらざりき

とすれば一層判然する事になりますから、この句は大きに動く句といふ事になります。さうし

てかゝる内容をもつ句は

鶯や二聲鳴けば見たくなる
梅室
山里は梅の咲く日があればこそ
蒼虬

これらの作品とどれ程相違があるでありませうか、第二句第三句も

馬車發つて垣に残れる黄菊かな
干足袋落ちて鼻にもどさん人もなし

世の中は進歩しても、藝術はそれについて進歩すべきものでないことを、これらの句を見て痛切に感ずる次第であります。

湯氣たちて起居忘れし如くなり
たかし

「湯氣たちて」だけで季節の感じをあらはさうとしたのでありませうが、鐵瓶の湯氣だか釜の湯氣だか風呂の湯氣だか不明であります。「起居忘れし如くなり」で座敷のこと、想像出来るだ

らう、といふ謎に等しい解き方であります。いくら俳句が季節に敏感でもこの句を以て秋とか冬とか春とかの區別はつきましますまい。さうした春夏秋冬の季節感などあらはれなくても、その場の氣分を波む事が出来ればよいといふのモあるなれば、それは井泉水氏や一碧樓氏等の主張と同等であると信ぜらるゝのであります。

左右に出づ柳の花に立ちにけり
素十

先づ第一「左右に出づ」といふ事が柳の花の形態を叙したのか、又は作者の動作を示したものが判然しないのであります。作者やその周囲の者にだけ判つてゐるといふても、その表現法からいろいろに考へさせられるのであつて見れば、それは辯解に過ぎないのであります。思案してあたはざる作者の弛んだ生活が感ぜられるのみであります。

直截にあらはすところに正しき俳句の表現法があるのでありますが、感情を弄ばうとしたり、遠廻しにあらはさうとしたりする手段は月並そのものでなくて何んでありませう

海贏遊びしてゐる脇の土遊び
旭川

何んといふ低徊趣味であります。

妓生の描く牡丹を見てをりぬ

百日紅

「牡丹」といふ文字さへ読み込んであればいゝといふのでありませうか、内容につれて調子もだらけ切つた、實に俳句の末世を思はせるやうな作品といはねばなりません。

ゆき過ぎて花盗人をみな待てる

夜半

實にどうも驚くに堪へたものであります。花盗人だから許してもいゝといふやうな無道徳漢、それ以外にこの句から何を感じる事が出来得るではありませんか

ゆき過ぎて瓜盗人をみな待てる

ゆき過ぎて梨盗人をみな待てる

一體かういふ作者は、現在を流轉しつゝある歴史といふ事を少しも考へて居ないのでありませうか、盲目的讀者を操る眼の前の隠し藝、それが今日我々が芭蕉や蕪村を研究し、又梅室や蒼虬

を研究すると同じやうに、五十年を出でずして一切を俎上で清算されるとき、かうした傀儡師の所置は如何なるのでありませう。

遠方を見てゐる鹿の夫婦かな

たけし

ホトトギス派の寫生の落ち行くべきところへ來たのでありまして、鹿そのものゝ状態のみを、解剖的に寫生することのみに腐心の結果、この句は無季で、鹿は秋交尾期に入つてその妻戀をする鳴き聲が、一種の悲哀な趣であるから「秋」でありまして、それらの特色のない時の鹿を詠じたのでは無季であります。

びいと鳴く尻聲かなし夜の鹿

芭蕉

鹿鳴いてはゝその木末あれにけり

蕪村

部屋々々に配る行燈や鹿の聲

虚子

鹿鳴くや皆落ちつくす燈籠の灯

雨青

小男鹿の蕎麥をはみゐる月下かな

荻聲

よし鹿の聲を聞かずとも、鹿としての特性からして四季の變化があらはれ、又は感ぜらるゝか、乃至は同等の趣があればよいのでありますが、遺憾乍らたけし氏の句からは何物をも感ずる事が出来ません。

門口に鹿ゐし奈良の旅籠かな たけし

この句の場合でも

奈良にて

門口に鹿ぐる宿や春寒し

といふやうにすれば、何にも「奈良」のといふやうな説明語を、短詩形として、一字もゆるがせにする事の出来ない表現法に取入れずに済む譯けであります。繰りかへして云ひますれば、「門口に鹿ゐし」といふところに、この句となるべき感情の動きがある譯けでありますから、「奈良の旅籠かな」はその説明に落ちてゐるのであります。それ故上句をうけてこの場合、下句は上句をより以上に働かせるべき季語の光被がなければならぬ筈でありまして、「春寒し鹿せんべい

も賣れぬなり」といふ句をこの作者が同時に作つてをりますので、「春寒し」と置いて見たのであります。

釋迦が死んでぐるりから顔寄せてとる 青 畝

二月十五日は釋迦の寂滅の日でありまして、この日釋迦牟尼は沙羅双樹の下で大涅槃に入つたのであります。この涅槃といふ事は無爲靜寂にして永く生死を超越し、常恒にして變ぜず、智以て測るべからず、形以て量るべからずといふ不生不滅の相をいふのであります。かういふ釋迦の寂滅を永劫に記念する意味に於いて佛者は各寺に於いて涅槃會を催すのでありまして、従つてその記念に對して何等かの心持のあらはれがなければ意味をなさないのであります。然るにこの句はたゞ釋尊の涅槃に入つた畫を説明してゐるのみでありまして、他に何等の意味がないのであります。

かゝる俳諧の根本精神を穿き違へたる作品を、昭和の今日に見なければならぬ事は、實に數はしい次第であると共に、如何にホトトギス派の俳句が、今日の俳壇を誤まらしめつゝあるかといふ事を、痛切に感ずるものであります。

静岡の茶をのゝしりながら嗅茶をしてゐるのであります、よしそれだけの事柄であつても、それに對する作者の感情に見るべきものがあればよろしいのであります、この句は單にそれだけの報告に過ぎないのであります、この句を以つてどこに詩があるといへませう。感歎詞として置かれてある「嗅ぐ茶かな」があるにしても、概念的常套手段として置かれあるのみで、感情から出た詠歎として置かれたものでないのであります。若し

有田蜜柑のゝしりつ むく避寒かな

かうした句があつたとしたらば、この作者は立派な俳句として頭を下げるであらうかと、疑はずにはをられないのであります。

以上はホトトギス派の作品中、俳句として我々の肯定し難い作品に就いて公平なる批判を下して見たのであります。

我等の進むべき道

梅室、蒼虬等によつて、俳句をして極度に墮落させたものを、子規の俳句革新によつて、明治俳句はその隆盛甚だ急なるを見たのであります、蕪村研究による俳句の季語聯想作用の興味を以て、俳句本然の本質かの如く考へ誤られ、然してその旺盛なる題詠によつて行き詰りたる所産として、新傾向俳句を生むにいたり、更に分裂して感覺的自由律短詩にその末路を踏みとゞまらむとしてをるのであります。

乙字は新傾向に入らむとする以前に、「故人春夏秋冬」の編輯にあたり、古俳句の妙所に觸れ、更にそれまで殆ど顧られなかつたかの感がある、芭蕉の俳句を論理的に研究し、俳句の進むべき道は自然靜觀による作法以外には無しと看破して、我々が將來進むべき大道を拓き示して呉れたのであります。

その乙字の唱へた正しき俳句の理論に相當したるところの作品を、今日の俳句から少しく抄出して、その句境を示して我等の進むべき道の槩としたいと思ひます。

琵琶湖

浪よせし松かさ並ぶ春日かな

句佛

芭蕉は「黄金をうすく打ちのばしたるが如き」を俳句の境地だと、解いてをりますが、この句などは真にその言葉に當嵌つた名作でありませう。靜觀の極致になつた珠玉のやうな作品でありまして、古俳句の上々たるものでも及ばない氣品の高い作であります。

旅にゐて何をあるじや嵯峨の月

露月

この句は故露月翁晩年の作でありまして、故郷の羽後の山中から約三十年振りて京都に旅をした時の作でありまして、時は恰度秋でありました。三十年もおなじ山中に雲のやうな靜かな生活をしてゐた作者が、旅に出て遷り變つて行く風物の珍しい中にも、月だけはおなじふるさとで見ると變りはないけれども、さて自分は何をあるじとするよすがもない旅の上であるといつた

詠歎でありまして、作者の境涯によつて出來た作でありませう。

朝顔や葎のうへに這ひかゝり

炎天

秋草はすべて物のあはれを伴ふ趣があるのでありますが、一朝で萎んでしまふ朝顔は別けてもあはれぶかい特性をもつてをります。その朝顔の花が、漸くに葎の上にとりついて花を持つたありさまは「這ひかゝり」といふ表現法によつて如何にもよくあらはれてをるのであります。

聯にして梅にからびぬ唐辛子

碧童

粗らかな梅の枝に、繩に通して干してある唐辛子が、葉も莖もすつかりからびてしまつて、實だけが眞紅を湛へながら冬されかゝつてゐる趣でありまして、簡素になるほど藝術の尊くなつて行くといふ一面を物語つてをる作品であります。

遍路にて

大龍寺下向行手の山の焼くる見ゆ

牛歩

四國遍路の時の吟でありまして、大龍寺は札所でありまして山の高みにある寺でありませう。その寺へ詣でた戻りの所謂下向の途上での吟でありまして、遙か目の下方に見える行手の山が、夕靄に包まれながらも、山焼の火がぼうと赤く見えた時、忽ち「大龍寺下向」と一氣に詠み出され、さうして「行手の山の焼くる見ゆ」と静かに置かれたものであります。ちつと立止つて物を視つめてをれば、その内に何か面白い見つけどころがあるだらう、といったやうな氣樂な寫生法とは異つてをりまして、實に堂々としてをるのであります。そしてこの一句の生るゝに就きましては、その内觀としての大きな苦勞が内在してをる事をも見逃がす事が出來ないものと思ひます。

氷見にて

能登馬の曳かるゝ麥の伸びにけり

花笠

「能登馬」といふのは越中國の方では冬季田野に馬の使用が不要になりますと、能登國の氣候のいゝ處へ預るのであります、さうして春田畑の仕事がそろそろ忙しくならうとする頃、飼主が能登まで出掛けて行つて、預け馬をつれて歸つてくるのであります。一冬の間を別れてゐた飼主

も馬も、この迎合には非常な親しみが湧くのは當然でありまして、それから春風の吹く能登海道を馬の旅がつゞけらるゝのであります。それが「麥の伸びにけり」といふ馬に最も親しみのある光景によつて活かされてあるのであります。地方による特種の現象も、このやうに普遍的に表現さるゝ時はじめて面白いのであります。

弓なりに舟橋押すや雪解水

鳥不關

「舟橋」は舟を何艘も繋ぎ合せて、その上に板を並べて橋としたもので、多く平野の河川に架けられてあるものを云ひます。その舟橋が雪解の増水の勢をうけて弓なり押されてゐる光景であります。

内容にも表現法にも寸分の隙のない作でありまして、關東平野を流れてゐる利根川の舟橋でも思はれるやうな句であります。

千島にて

大澤や熊あそびゐる露の雨

知白

鈍感で、どことなく愛嬌のある熊、それが澤に出て蟹でもとつて食べてゐるのでありませう。鬱蒼と茂つた露の林に降る雨、傘をひろげたやうな大きな露の葉の緑、それに悠然としてあそんでゐる熊の黒、大粒に落ちてくるしろがねの雨、さうしたものゝ配合が如何にも千島でなければ見られぬところで、そこにこの句の生命があるのであります。北國特有の光景であります。普遍性と悠久性を多分にもつてをりますので、千島を知らぬものにもよく情景が汲まれるのであります。

ひそと咲く山吹黄なり四明の忌 水 椀

「四明忌」は故中川四明翁の忌日の事で、鳴雪翁と共に明治俳壇に貢献の多かつた人であります。その忌日が五月十六日でありますので、故人と関係の深い作者が、その忌日に腹痛を祈らうと思つて庭前を見ると、青葉若葉の中に四五輪咲き残つてゐる山吹の花の黄色が眼にとまつたのであります。「ひそと咲く」といふ表現法も、花期をすぎた山吹の花をあらはするに最も適つた句法でありますし、又忌日であるといふ作者の心持をもあらはすに申しぶんの無い作品であります。

夕浪に店ともりけり炭間屋 龍 雨

この場合の「夕浪」は隅田川の夕方、潮時にあげてくる浪であります。問屋の忙しい中にも荷役時の最も忙しい時とする、炭間屋の店さきでありませう、今しがた、ともしつらねた燈が夕べの空気に澄まされて美しく瞬きあつてゐるのであります。江戸情緒のしんみりした味ひぶかひ作品といへませう。

横ざまに桶に揃ふや花菖蒲 撲 天 鵬

手桶か関伽桶に切つて浸けてある菖蒲の花を詠じたのでありまして、「横ざまに」といひ「揃ふや」といつたところに、花菖蒲の特性を遺憾なく把握してあるのであります。

度々述べたのでありますが、要するに俳句は諸物象の特性をいかに把握するかといふことが、その作り方の秘訣の鍵であります。「山静かならざれば草木生ひず」でありまして、境涯としての感動はありまして、機縁としての静観がない時は、俳句はいつまで経つても生れないのであります。従つて静観によつて物象の特性を把握するといふ事は、如何なる場合でも句作道にとつ

ては大切な事でなければなりません。

緑蔭をいでゝはかへす揚羽蝶かな

王城

「揚羽蝶」のことをあげはと讀ませる事は少しも無理ではありません。水を打つたやうな静かな若葉の庭を、飛び去つたかと思ふと又飛び來たる揚羽蝶を詠じたのでありまして、閑寂そのものゝやうな境地であります。

赤倉

草の中に鶯鳴ける雷雨かな

白水郎

「赤倉」は越後妙高山の山腹にある赤倉温泉であります。はげしい雷雨が襲來したかと思ふとまた見る間に晴れてゆく、その雨の降る中を如何にも涼しげに草の中に鶯が鳴いてゐるのであります。そして、「草の中に」と叙したところが、いちめん萱や茅で覆はれてゐる赤倉邊の地象をよくあらはし、又鶯と雷雨の関係も少しの無理がなく、見た儘を何等の私心を交へず詠じたところにこの句の尊さがあるのであります。

花散らす雨にくむ茶や切山椒

徂春

「切山椒」は餅菓子の一種で、中に山椒の實を粉製したものを搗き交ぜて紅白に細く切つてあるものであります。江戸時代のもので春の菓子とされてあります。

「花散らす雨」といふことは、何んでもないやうで苦心の痕があります。即ちこの雨で花も散つてしまふのか——といふ散る花に對して作者の愛惜感としての、雨を恨みとしてゐる心持ちをあらはさうとしたところがそれです。花の雨にしづかに茶を喫してゐる團樂を思はせる作品であります。

清水寺

春晝の京を見てゐる舞臺かな

黒洲

春の晝を漫然と來て清水の舞臺の上から、京都の町の上を見渡してをるのであります。ただそれだけの事で何んの變哲もないのですが、その何んの變哲もないところにあるものがあるのであります。あらしめやうとして強いて作つたものとは、そこにおのづから雲泥の相違があるの

であります。見馴れた景色、何んの變つた事のない京の町ではあるが、ひとりぼつちでぶらりとやつて来て、しみく眺めて見ると、そこにまた云ひ知れぬ懐しさと親しみが湧いて来て、この句が出来るに至つたのであります。

松島五大堂

涼しさや島暮れそめて堂閉ずる

刀水

暮れてゆく島が夢のやうに浮んでゐる海の上、思ひ出したやうに岸に打ちよせてくる波の音、さうした中であつて五大堂の堂扉が、海光を僅かにうけ乍ら閉さるゝ光景でありまして、この涼しさや」といふのは夕風が吹き渡つてくる觸覚としての「涼しさや」ばかりでなく、暮れてゆく島かけ、堂を閉づる音、波の打ちよするひびき、さうしたさまじく感じの上での「涼しさや」であるので、そこにこの句の渾然として湧いてくる情趣のはかり難いものがあるのであります。

大震災

蚊帳の上に櫻落葉や月明り

蒼梧

關東を中心とした大正十二年九月の大震災の時の吟詠でありまして、大いなる不安からは漸く脱したけれども、まだ時々襲うて来る餘震のために作者は家の程近い空地に寝起して居たもので、秋とはいへまだ溢れ蚊の出るまゝに蚊帳を草の上に吊つて横になつてをると、蚊帳の上に二葉三葉の櫻の落葉が散つてをるのが、さすがに不安の中にも面白う眺められたのでした。そして今まで氣がつかなくかつたのでした、その落葉の見えるのはどこからとなくさしてゐる月の明りのためであつたと氣がついた時、この句は生れ出たものであります。

干蕨山家の春は盡きにけり

橙黄子

山家の春は干蕨に盡きてしまつた、たゞそれだけでありますが、如何にも山家の惜春の情堪へがたきものが感じられるのであります、言外の情あふるゝといつた作品であります。

笈織ぎて水さき濁る春日かな

瓜青

飲用料の水を引いてある笈が、冬季凍て破れたところより水を噴き出してゐるので、春を待つて修繕したのであります。その修繕によつてしばらく濁りの絶えない笈の水が、春の日さしをい

つばいにうけて落ちてゐるのであります。忠實な寫生句といへませう。

吉野吉水院にて

流水や櫻しばしも散りやます 雨 青

花の吉野へ杖を曳いた時の吟でありませう。かうした歴史に深い背景を以つた名所へ、然も花の散るさかりなどに來た時は、非常に感激し易いものであります。従つて感激したものより以上で誇張するであります。さうした誇張は、やがて感情を四散化せしめるといふ破綻が伴ひ易いので危険であります。しかし、この場合の作者は、いとも素直に自然を詠めてをるのであります。この句の底に流れてゐる靜かな氣韻は、讀者をして永劫の世界へと引き入るゝものがあるのであります。

往診途上

雁鳴くやまどろみ淺き馬の上 五 沼

この作者の住所は羽後國の山間でありますから、病家へ往診に行くにも馬の脊を借りねばなり

ません。石ころや木の根の多い山路を一步々々と行く道程は、おのづから眠氣を催してくるのであります。さすがに往診といふ目的と又馬の上であつて見れば、深く眠ることもならない折しも、頭の上方で雁金の一聲二聲が耳に入つたといふので、馬の上での眠い心持が雁金の聲によつて詠歎されたものであります。寫生といへば對象物をのみ寫すことゝ考へてゐるそれとは大いに異つてをりまして、この句の如き主客合體の場合、如何によく自然と人生との融合點を描き得てゐるか、まことに深く味ふべき作品であると思ひます。

二 見 浦

荒海や見る間に暮るゝ冬日さし 芒角星

東北の風を眞向ひの二見浦の冬は、思ひの外浪が高い荒海であります。岸に打ちよせる白浪の花以外には、一面に紺黒色を湛へた潮で、白い浪の穂が沖へかけてゆくに従つて小さくたゞまれ、遙かに横たはつてゐる伊良古岬の低い山々へかけた冬の日さしが「杜國の棲んでゐた保美の里はどのあたりであらう、鳴海はあの邊かしら」などと宿の二階の欄に立つて指さしてゐると見る間に、暮れてゆくあはただ慌しさに驚いて出來たものであります。一瞬の内に變化してゆく冬の日

の荒海の光景が如何にもよく現はれてをるのであります。

消えて淋しく燃えてかなしき螢かな

黙興

これは螢といふものに對しての、作者の理想が詠じられてあるのであります、直感のそれとはいさゝか趣を異にしてをりますが、寸分の餘地もない仕立て方の手際の妙味が、少しの嫌味も感ぜられず然も螢の特性の把握に、十分の意を置かれてあるところにかゝる行き方の句の存在せらるゝ理由があるのであります。

燈も蚊帳もひとつに動く夜風かな

筭莊

寝る前の一時を放けつばなしで縁に涼んでをると、庭の樹々から起つてくる一陣の風が部屋の中に吹き入つて、吊つてある蚊帳も燭火も一時に吹き靡かせられたので、その刹那の感じを何んのはからひもなく卒直に寫生したものであります。物に感動したらばたゞちに詠じ出される用意が即ち練習でありまして、かうもいはふかあゝもいはふかと考へてゐるうちには、感動したものが逃げてしまつて、言葉ばかりが後にのこるやうな事に成り易いのであります。言葉や用語が

目にたつやうな作品のよろしくないのは即ちそれであります。

満洲にて

空不知うつして、廣し春の水

一九八

この句には註釋がありまして「満洲にてはポプラの事を空不知といふ。」といふのがそれでありまして、ポプラの樹の性質から面白い方言だと思ひます。一列に並んだポプラの樹が天空を衝いでそよぎ立つてをりまして、しかもその新芽時の美しさは格別で、その美しい樹並をうつして揚州の流れが満々と湛へられてゐるありさまで、まことにのびのびとした趣は、支那でなければ見られない光景であらうと思ひます。

(を は り)

昭和十五年八月一日印刷
昭和十五年八月十日發行

【定價金壹圓五拾錢】



不許複製

著作者

吉田冬葉

發行者

飯尾謙藏

東京市小石川區江戸川町十八

印刷者 萩原芳雄

東京市牛込區山吹町一九八

發行所

東京市小石川區
江戸川町十八番地

交蘭社

電話小石川五二〇一
振替東京四〇二七九

伊藤鷗二	同	同	吉田冬葉	同	同	同	同	同	同	水原秋櫻子
俳句及俳壇を説く	子規の俳句と其一生	俳句作法七講	俳句の作方と味ひ方	連作俳句集	自句自釋わが俳句	俳句の本質	句集新樹	俳句になる風景	俳句になる風景	新選俳句季語解
金一圓廿錢	金一圓六十錢	金一圓五十錢	金一圓五十錢	金一圓廿錢	金一圓廿錢	金一圓	金一圓五十錢	金一圓四十錢	金一圓四十錢	金二圓

交 蘭 社 發 行

407
423

終

